The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	バジャウ・ラウトに関する人類学的研究の課題と展望
Author(s)	上田, 達
Citation	年報人間科学. 2002, 23-1, p. 75-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11305
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

バジャウ・ラウトに関する人類学的研究の課題と展望

上田　達

〈要旨〉

本論文はマレーシア・サバ州からフィリピンにかけて広がるスールー海を囲む地域で生活するバジャウ・ラウトという一民族集団についての先行研究を批判的に検討して、研究の方向性を探る試みである。

米国の人類学者、セイザー（Clifford Sather）がバジャウ・ラウトに関するモノグラフの中で言及した二つのパトロン・クライアント関係の類似した性質をそれぞれ概観した後で、それらの間にある差異を示す。差異はバジャウ・ラウトのおかれている文脈の相違による。「漂海民」や「海のジプシー」と表象されることがあるように、いかに彼らが国境付近で移動性の高い生活を送っているとしても、彼らとて現代の国民国家システムの中に生きるのであり、彼らの埋め込まれた文脈への配慮は、人類学的研究において適切に行われねばならない。

キーワード

バジャウ・ラウト、パトロン・クライアント関係、マレーシア・サバ州、スールー海、定住

はじめに

本論文の目的は、東南アジア地域に住む、ある民族集団の社会変化を考察し、人類学的研究の一つの視座を示すことにある。具体的には、スールー海を囲む地域にすむバジャウ・ラウトと呼ばれる民族集団についての先行研究を批判的に検討する。その後でバジャウ・ラウトについての人類学的研究の方向性を示す。まず、一章では、①インドネシア東部からフィリピン南部に広く居住するバジャウ族についての研究動向を整理して、バジャウ族についての概観を得ること、②論文全体の問題意識を明らかにすること、の二つを目指す。続く二章と三章でバジャウ・ラウトについての具体的な事例をセイザーの民族誌に依拠しつつ提示する。四章では二章と三章の事例を比較することで本論文の主張を明確にする。

一―一　バジャウ族について――および先行研究の整理

スールー海のバジャウ・ラウトについての研究は、国内外を含めて多く蓄積されている。陸に家を持たないで家船と呼ばれる船の上で居住する民族集団として、彼らは人類学の対象であり続けてきた。また、人類学以外の分野においても、「漂海民」としてジャーナリストや文筆家が叙述してきた[1]。

スールー海域は、床呂の言を借りれば「生活様式や文化の異なる複数の民族集団が、共生や支配と従属などの関係を通じて相互作用を行なっている、一つの多民族社会（poly-ethnic society）」（床呂一九九二：二）である。この海域に住む人々は言語学的見地から二つに大別される。一つはサマ／バジャウ系で、もう一つはタウスグ系である（Pallesen 1985）。サマ／バジャウ系が地理的に広く分布し、言語・社会・生業形態も多岐に渡るのに対して、タウスグ系は文化的に均質で、十五世紀から十九世紀に興隆したスールー王国の中心地のホロ島に集中して居住しており、現在もこの地域で有力な集団を形成している（Kiefer 1972, Nimmo 1968, Sather 1993）。

フレイクは、こうした二分法をエスニシティ化（ethnicitization）の結果であるという見解を示す。つまり、スールー王国内で徐々に顕在化していった位階や政治的地位の相違に民族的意味が付与され、言語や文化や起源の差に帰されたというのである（Frake 1980）。エスニシティ化の結果、分割されたアイデンティティが発達し、神話的歴史が形成されていった。例えば、タウスグ族はスールー海の元来の住人で、サマ／バジャウは「新参者」や「ゲスト」と見なすようにである。床呂もスールー諸島の人々を研究する際に、民族編成の秩序を非歴史的に説明することを戒める（床呂一九九二）。

本論文で視野に収めるのは、サマ／バジャウの中でも「漂海」生活を送っているか、あるいはごく最近まで「漂海」生活を送っていた人々である。彼らはスールーの海原を舞台にして、海上を移動しながら生活を送ってきた。彼らは、スールー海域とボルネオ島近辺では近隣の人々に「バジャウ」と呼ばれるが[2]、彼らの自称は「サマ」である。特に「漂海」生活を強調して示す際には、「サマ・ディ

ラウト（*Sama Dilaut*）」、「サマ・マンデラウト（*Sama Mandelaut*）」と自称する。両者は共に「海のサマ」を意味し、「真のサマ」を含意する。しかし、セイザーは著書の中で民族呼称の用法を説明した後で、マレーシア語で通常用いられていることを根拠にバジャウ・ラウト（*Bajau Laut*）を呼称として採用する（Sather 1997）。本稿もマレーシアのサバ州に焦点を合わせているため、セイザーの用法に倣うものとする。

「漂海民」のバジャウ・ラウトについての研究の成果は、すでに何人かの人類学者によって上げられている。上に述べた米国の人類学者のセイザーが、サバ州東岸での集落を中心に一九六〇年代から継続的に調査を行っており、またフィリピン領となるスールー諸島でも米国の人類学者のニッモがほぼ期を一にしてフィールドワークを行って、その結果をまとめている[3]。

日本でも一九九〇年代に入って、床呂がスールー海での調査結果に基づいて興味深い論考を著した。また、長津はサバ州での調査結果の一端を、バジャウ・ラウトとイスラム教との関係に関する論文の中で示した[4]。

一―二　「定住」と問題提起

前節で漂海民として知られるバジャウ・ラウトについての概観を示した。しかし、「漂海民」としてのバジャウ・ラウトは徐々にその姿を変えつつある。彼らの生活もまた当然のことながら、絶え間ない変化の過程にあることをわれわれは認識しなければならない。

東南アジアで広く見受けられた海上生活者たちが、家船での生活から陸地に家屋を建設しての「定住」生活へと移行していったように、スールー海のバジャウ・ラウトもその例にもれることはない。彼らを「定住」生活へと導いた要因は、市場の形成、交換手段としての貨幣の導入に代表される経済的なものから、国民国家システムの確立による国境の画定がもたらす移動への制約といった政治的なものなど、いくつか挙げることができる[5]。

もっとも、船の上での生活者が近代的な「定住」生活へと変わっていくと見るのは、あまりに単純な「近代化」の図式に見えるかもしれない。床呂はこの点を強調し、海と陸との間に不可逆的な経路を設定することに異を唱えている（床呂一九九六、一九九九）[6]。

しかし、こうした留保をつけてもなお、バジャウ・ラウトの居住様式の変化を看過することはできない。床呂が危惧するように、海での生活に戻る者がいることを認識しつつも、それまでの移動生活から動きを止めた中に見られる事象に注意を向けることには、一定の意義があると筆者は考える。事実、「定住」の中に本論文で示すような興味深い二者間の関係が生成している。「定住」という文脈における、この興味深い関係を考察することで、バジャウ・ラウトの位相を捉えることができるのではなかろうか。

一―三　問題の所在

セイザーは、上述の論者の中においても、生活の変化を長いタイムスパンで実証的な研究に基づいて描き出した論者の一人である。

彼は、東マレーシア・サバ州の東岸部に一九六〇年前後から形成された「漂海民」バジャウ・ラウトの杭上家屋の集落で人類学的なフィールド・ワークを行い、その成果をモノグラフに著した。

杭上家屋の集落は中核部分が形成されると拡大の一途をたどった。その人口はセイザーが調査を行った一九六五年に五一〇人であったのが、一九七九年には一九八二人にまで増加した。数的な拡大は同時に共同体の質の変化を伴った。バジャウ・ラウトが建設された最初の杭上家屋の周りに同様の家屋を建てていく一方で、フィリピンからの「難民」が訪れるようになる（Sather 1997）。つまり、二つの国民が混在する共同体になったのである。セイザーは、両者の間の関係を近代国民国家形成以前の時期における「漂海民」としてのバジャウ・ラウトと陸地の首長との間に結ばれた関係になぞらえて理解しようとする。セイザーはパトロンとクライアントを術語として採用し、これをパトロン・クライアント関係と呼んでいる（Sather 1984: 13-15, Sather 1997）。

セイザーの二つの関係の類似性への印象的な言及は軽率であり、これに対する批判はきわめて容易である。たとえば、バジャウ・ラウトという民族集団の中に、パトロン・クライアント関係と親和性のある性向が、あたかも本質としてあるかのように描いている、と批判出来よう。

しかし、「比較するまでもない」と簡単に斥けるのではなく、二つの関係を同列に並べて比較することで、両者が埋め込まれている政治・経済的文脈はより明確になるであろう。これまでの研究で軽視されていたわけではないがあまり重きをおかれなかった、彼らを取り巻く変化に対峙するためには、どのような政治・経済的な文脈に彼らが位置付けられるのかを示さねばならない。このような遠回りして達したゴールが上記の批判と同じ地平であったとしても、バジャウ・ラウトの歴史的位相を明らかにして研究の方向性を示す予備的考察の意義は小さくない。次のステップに進むために、セイザーの持ち出した類似性を一つのキーとして、二つを比較の舞台に上げてみたい。

二章　スールー王国期のパトロン・クライアント関係

本章では、スールー王国時代から植民地期にかけての時期におけるボルネオ島東岸の人々のネットワークを、特にバジャウ・ラウトとの関わりにおいて論じる。以下に示すが、この「人のネットワーク」をセイザーはパトロン・クライアント関係として分析している。バジャウ・ラウトに関連する一つ目のパトロン・クライアント関係の性質を明らかにし、その崩壊までの軌跡を辿っていくことが本章の目的である。

二―一　スールー王国

スールー王国は十三世紀にスルタンアブ・バカル（スルタン・シャリフ・カシーム）によって創始されたとされる（Saleeby 1963: 46）。王国の中心地はスールー海のホロ島にあり、ホロ島は政治的中心地

の役割を果たすとともに、地域経済の中心地としても繁栄した。アジア諸国が植民地化の影響を被っていた時期も、スールー王国はフィリピン北部を植民地化したスペインと衝突はしたものの、中心地であるホロ島にまでスペインの勢力が及ぶことはなく、一八七六年にホロ島が陥落するまで権勢を誇った[7]。王国の勢力は、最盛期には東側の境界線がボルネオ島に及ぶほどであった。ブラウンによると、十八世紀から十九世紀にかけての時期は、現在のサバ州にあたる地域はスールー王国の勢力下にあったという（Brown 1971: 55）。

スールー王国の政治形態について重要なことは、中央にスルタンを中心とするヒエラルキカルな政治制度が確立されてはいたものの、地方の有力な首長はその地方においてスルタンと同様の権威を持っていたという点である。スルタンは各地方の首長を任命するが、任命はそれぞれの首長を追認するに過ぎなかった。地理的に周縁部の社会の構成員は、首長に直接の忠誠を向けていた。キーファーはスールー王国を分節国家（segmentary state）として分析する（Kiefer 1972: 109）。スールー王国という分節国家の中においては、たくさんのサブユニットや分節があり、それらは互いに、機能的に差異化されていない。そのような制度下では、中央の政府はあっても周辺においては、ほとんど支配力を持たない。地方の首長は中央から自立した権威を有する（ibid.）。

上記のように、王国の政治体制はスルタンを頂上に据えるピラミッド状に構成されたヒエラルキカルな構造を持ちつつも、それぞれの首長が独立して権威を有する体制であった。スルタンを含めた政治的な上位を占めるのは、ホロ島を主たる居住地とするタウスグ族であったが、王国内で称号の付与によって任命されるポストにはタウスグ族以外の人々も就くことが可能であった（Kiefer 1972: 108）。

しかし、バジャウ・ラウトを含むサマ／バジャウの人々は、一般に、タウスグ族の下位に位置づけられていた。とりわけ、陸地に居住せず土地を持たないバジャウ・ラウトは、王国のヒエラルキカルな構成内で最下層を占めていた。

二―二　パトロン・クライアント関係

漂海民といわれるバジャウ・ラウトも、常に海上を移動しつづけるわけではなく、特定の係留地をもっていた。その係留地を支配する首長とバジャウ・ラウトの間に結ばれる関係を、セイザーはパトロンとクライアントいう語を用いて説明している（Sather 1984: 13-15, 1997: 60-63）。

バジャウ・ラウトは、バンドを単位としてパトロンたる首長に文字どおり「所有される（*taga*）」といわれる。政治的な統合を欠いていたバジャウ・ラウトにとって、陸地に住む首長こそが彼らを保護する存在であった。交換する者は互いを「友人（*bagai*）」と呼び習わしていたという。また、パトロンはクライアントを「我々の者（*mundusia'na*）」、あるいは「我々のボート集団（*pagmundah na*）」と呼んでいた（Sather 1984: 14, 1997: 60）。

バジャウ・ラウトを「所有する」パトロンは、奴隷収奪を含める略奪をはじめとする周囲の危険から彼らの安全を確保することが求

められた。パトロン同士も抗争関係にあり、隣接する他の首長の攻撃からバジャウ・ラウトを守った。バジャウ・ラウトの家船は武装することがなく、バジャウ・ラウトの生活は外部からの攻撃に対して無防備であり、このようなパトロンの庇護がなければ生活を続けることが困難であった。口頭伝承による限り、パトロンの庇護は、実効性を持っていたようである（Sather 1997: 60）。

パトロンとしての首長はバジャウ・ラウトの身体的安全を保障する代わりに、クライアントとしてのバジャウ・ラウトと特権的な交易関係を享受できた。セイザーによると、バジャウ・ラウトと陸地の首長との間の交易関係は、二つの側面を有していたという。すなわち、一つは共生的な関係性で、一つは調達経済を構成する関係性である（Sather 1984: 14, 1997: 61-62）。

前者においては、必需品とローカルな工芸品が交換された。陸地のパトロンは、物資の交換（*magsambi*）に加えて陸地での真水や薪の調達を許可した。バジャウ・ラウトがパトロンの村に滞在している時には、獲得した海産物をその村の首長に差し出し、他のパトロンと物資を交換しないことが求められた。その見返りとしてバジャウ・ラウトはパトロン側から、キャッサバやココヤシ、果物、ビンロウ等の農産物、ならびに衣服や各種の加工品を得た。パトロンは、結婚や村での集会のような特別の場合に、クライアントであるバジャウ・ラウトに魚の供給を求めた（ibid.）。

二つ目の関係は、スールーゾーンを構成する大規模な交易関係の一部を成すものである。バジャウ・ラウトはパトロンに対し、対外交易品としての干魚、ナマコ等の各種の海産物をもたらした。パトロンはこうした物資をより権勢のある首長との交換に用いた。つまり、バジャウ・ラウトがパトロンの政治的役割の拡大に関して、一役を担ったのである。対外交易の盛んなスールー王国において、バジャウ・ラウトはその末端で、首長とのパトロン・クライアント関係の中で交易物資を調達する役割を担っていた。この意味において、交易が物々交換のみの経済的関係ではなく、地位や政治的服属の関係を表しているとセイザーはいう（ibid.）。

さて、以上のような交換関係が成立してはいるものの、バジャウ・ラウトは首長の完全な支配の下にあったわけではない。バジャウ・ラウトは船上居住のため、パトロン・クライアント関係にあるパトロンの係留地から、別の場所へと簡単に係留地を変えることが出来た。その移動性ゆえに陸の人々は、彼らにクライアントの位置を強制することが出来なかった。もし、パトロンがクライアントであるバジャウ・ラウト集団内部のことに干渉したり、専断的に振る舞ったり、義務的なものを要求しようとしたら、バジャウ・ラウトは即座に移動して、他の首長の影響下にある場所を係留地に選定するという（Sather 1984: 14-15, 1997: 62）。

バジャウ・ラウトが、新たに庇護を供する次のパトロンを探し出すのはさほど困難なことではなかった。彼らは、常に特定のパトロンのみと交易を行っていたわけではないからである。上に示したパトロン・クライアント関係が結ばれている時でさえ、彼らは他の集団との交易を継続していた。時に工芸品（鉄製品、マット、べっ甲

の櫛、船など）を求めて、それらの扱いに長けた他の陸地の集団と交易関係を築いていた。その場合、陸地の集団もバジャウ・ラウトに友人としての善意を示した(Sather 1984: 14, 1997: 62)。

パトロンとしての首長は、スールー王国の政治構造においてバジャウ・ラウトより上位にあり、バジャウ・ラウトを劣位にあると見なしてはいるものの、実際的な力を彼らに行使することはほとんどなかった。パトロンとクライアントの関係は、「友人」という言葉のわりに、その基盤は脆弱なものであった。バジャウ・ラウトはクライアントとしての地位にありながら、パトロンを選択することが可能であり、また、結ばれる関係も一時的であった（Sather 1984: 14, 1997: 62-63)。バジャウ・ラウトはパトロン・クライアント関係において階層的に下位にありはしたものの、ある程度の自立性を有していたのである。

二―三　スールー王国の崩壊から会社統治へ

現在のマレーシア・サバ州にあたるボルネオ島北東部は、一八七八年にイギリスとオーストリアの商人たちに割譲された。彼らは北ボルネオ会社（後に特許状を付与され、北ボルネオ特許会社と改称）を設立し、植民地経営を始めた。会社は経営の拠点として東岸部にいくつかの都市を建設した。しかし、会社の支配は広範に渡るものではなく、地理的に限られていた。また、会社は東岸部におけるスールー王国期から存在していた首長制を改変することがなく、それぞれの首長を追認したため、会社の経営開始後しばらくは以前の交易関係は保持されていた（Sather 1997: 44-45)。

しかし、会社はその影響力を徐々に強めていく。最も大きな影響力を及ぼしたのは、交易ステーションとして機能する都市の建設である。都市の建設によって、スールー王国期の首長制とそれに基づくパトロン・クライアント関係は消滅していった。交易ステーションの建設は、バジャウ・ラウトを市場経済へ招き入れた[8]。それまで、パトロンに海産物をもたらしていたバジャウ・ラウトも、獲得物の多くを都市の市場にもたらすようになる。従来、バジャウ・ラウトの生活は自給自足ではありえず、その多くを交易に依存していた。市場は、伝統的なパトロン・クライアント関係よりもバジャウ・ラウトにとって有利な関係をもたらし、貨幣が交換を非個人化したため、伝統的な関係に内在する従属関係からもバジャウ・ラウトを解放した（Sather 1984: 18)。バジャウ・ラウトは、パトロンとの物々交換から市場での交易にシフトしていった。一九二〇年代まで貢納を通じたパトロン・クライアント関係は存在していたものの、急速にその関係は衰退していった（Sather 1984: 17-18, 1997: 46-54, 63)。

伝統的なパトロン・クライアント関係が崩壊したことに続き、会社がバジャウ・ラウトに政治的認知を与えたことはバジャウ・ラウトにとって大きな変化であった。すなわち、バジャウ・ラウトの共同体のメンバーを首長(*orang tua*、のちに*panglima*の称号を付与)に任命したのである。バジャウ・ラウトは、初めてスールー海の政治社会において公式に政治的スポークスマンを得た(Sather 1984: 19)。

スールー王国期に、経済的・政治的に従属的立場にあったバジャウ・ラウトは、王国の終焉とともにその地位を脱した。上記のように、経済的・政治的事情に加えて、彼らの地位は、のちに宗教的な改善がもたらされた。また、陸地に住むことによって、バジャウ・ラウトは「土地なき民」として軽んじられることもなくなった。

海の従属者としてクライアントの地位にあったバジャウ・ラウトは、もはや海にいない。しかし、空けられた従属者の地位は、程なくして次の集団によって占められる。次章では、サバ州東岸に生起する新たな階層関係について論じていきたい。

三章　新しいパトロン・クライアント関係

会社統治期から、第二次大戦とイギリスの直接統治時代を経て、かつて漂海民と呼ばれたバジャウ・ラウトは杭上家屋を建設しての「定住」生活へと移行する。彼らはマレーシア・サバ州において、「公的に」一民族として認知されて「サバ州民」となった(9)。

上記のようなバジャウ・ラウトの生活様式の変遷と、スールー海の不穏な政治状況が彼らの住むサバ州にも及ぶに至り、かつてのパトロン・クライアント関係と類似した関係性が看取されるとセイザーは言う。関係を構成する二者が誰であったのかを明示するため、まず一節においてパトロン・クライアント関係を生じさせた原因となった一九六〇年代以降のスールー海における政治状況の概像を描く。その次にパトロン・クライアント関係の具体的な事例をセイザーの民族誌的資料をもとにして示す。

三―一　ミンダナオ内戦と「難民」の発生

一九五〇年代からフィリピン政府の主導によって、ルソン島やビサヤ島からミンダナオ島へキリスト教徒の入植が進められた（池端一九九九:三三四―三三八）。北部からのキリスト教徒によって、先住民たるイスラム教徒たちの土地は周辺へと追いやられた。北方からの入植者とミンダナオ島の人々との間の軋轢は日増しに程度を増していった（鶴見一九八四:一六六―一七八）。

一九七二年にヌル・ミスアリを中心として「モロ民族解放戦線（MNLF）」が組織される（池端一九九九:四四八―四四九、Che Man 1990: 77-78）。彼はフィリピン南部のフィリピンからの分離独立を主張して、アラブのイスラム諸国との連帯を探りながらイスラム性を前面に押し出して活動を続ける（鶴見一九八四:一七九―一八一）。MNLFの武装蜂起は一九七二年のホロ島蜂起に始まった。MNLFはリビアをはじめとする他のイスラム諸国からの支援を受けて、激しくフィリピン政府に抵抗した（鶴見一九八四:一八四―一八六）。これに対して、フィリピン政府はホロ島をイスラム教徒の拠点とみなし攻撃を仕掛ける。一九七四年のホロ市における政府軍とMNLFとの衝突は双方に多数の死者を出した（鶴見一九八四:一八一―一八二）。

フィリピン軍とMNLFとの衝突は、リビアを中心とするイスラム国家の主導によって一九七六年に一応の決着がつけられた（池端一

九九九：四四九）。その後も局地的に戦闘は続いたが、MNLFとフィリピン政府は一九九三年の暫定休戦協定を経て、一九九六年に和平協定を締結した（池端 一九九九：四五〇―四五一、四五八）。

以上のような状況において、スールー海の民族構成も変化を被る。一九七〇年代のスールー海の状況について研究したニッモは、内戦の他にいくつか要因を挙げながら人の移動について説明を加える[10]。彼によると、ホロ島に居住するタウスグ族が南西方向へと移動したことで、サマ／バジャウ系の人々、とりわけバジャウ・ラウトが追いやられる形でサバ州へと移動していった。ニッモはこれをドミノ効果と呼ぶ（Nimmo 1986: 31）[11]。

ドミノ効果に伴ってマレーシア・サバ州に流入した人の数は、十万から二十万と見積もられる（鶴見 一九八六：八五―八六）。しかし、正確な数字を知ることは、彼らの立場を顧慮すれば不可能である。サバ州内で発表される数字はしばしばその値を変える（浜元 一九九五：九一―九二、Uesugi 2000: 37）。

三―二　具体的な事例：セイザーの民族誌より[12]

サバ州政府が国連高等難民弁務官事務所（UNHCR）と歩調を合わせて「難民」対策を行なっていた時、フィリピンからの「難民」は内務省の管轄の下、州政府に指示されてセンポルナ地区の中にある居住区に移る。しかし、UNHCRの再定住区の他にもフィリピン人は居住している。センポルナ近郊にあるフィリピン人の住む共同体[13]として、セイザーは代表的な四つを挙げる（Sather 1997: 87-88）。

その中には、彼が調査を行ってきた集落であるバンガウバンガウも含まれる。バンガウバンガウは、一九六〇年代以降、以前漂海民であったバジャウ・ラウトが新しく築いた杭上家屋の集落である。バンガウバンガウではフィリピンからの「難民」の数が一九七九年の時点で共同体内の人口のほぼ半数を占めている。彼らは「よそ者の」を意味する「プラリアン（*pelarian*）」と呼ばれる（Sather 1984: 24, 1997: 87）。

彼らは、合法的にサバ州にとどまるために、サバ州民の支援を仰ぐ必要があった。彼らの身元を保証する「サバ州民」は「ジャルミン（*jalmin*）」として知られる。彼らはプラリアンの親戚である場合もあれば、そうでないケースもある。プラリアンは身元保証の代価として、金銭の支払いをするか、もしくは金銭の支払い以外の形でジャルミンにサービスを提供することが必要である。保証人たるジャルミンは、プラリアンに職を与えていることを記した文書を、サバ州の移民局に提出することが求められる。ジャルミンと関係を結んだ者は、「ジャルミナン（*jalminan*）」という。フィリピンから来た人々は、被雇用者になることでサバ州での滞在が許されるが、実際にジャルミンはジャルミナンに職をほとんど与えておらず、名目上の地位にとどまっている（Sather 1984: 24, 1997: 88）。

プラリアンは生業が限られる。彼らの多くは、①資本金がかからないことや、②交易や賃労働に比べて従事しやすいことから、漁業に従事する。一九七九年の時点で、漁撈を主たる生業としている世

帯の半数以上が、プラリアン世帯である。以前バジャウ・ラウトによって行われていた村の漁撈は、フィリピンから来た人々に取って代わられた（ibid.）。

海産物のジャルミンの中には、身元を引き受けたプラリアンを利用して大規模な集団漁を組織する者も出始める。セイザーは二人のジャルミンの具体例を挙げる。Tという男はO島付近の漁場まで数隻の船をエンジンボートで曳航していく。目的地に到着すると、曳航されてきた船に乗るジャルミナン達はそれぞれの小船を操縦し、イカやタコを捕獲する。Tは必要経費を除いた収益は漁に携わった人で均等に配分する（Sather 1997: 89）。

Sという男はTとほとんど同じやり方で漁を組織する。大きな違いは、必要経費を受け取らない代わりに、漁に従事した者から魚を得る際に市場価格のおよそ四分の一で魚を買い取る点である。ガソリンなどの必要経費は彼が市場で得る利益の中から支払われる。彼の取る様式は、「マグパジャック（*magpajak*）」としてバジャウ・ラウトの間で知られる。Sはジャルミンとして有利な価格で得た獲得物を市場で取り引きして利益を得る一方で、市場でのリスクもまた背負い込むことになる。また、何らかの理由で出漁できない時は、ジャルミナン及びその家族の扶養を期待される（Sather 1997: 89）。

フィリピンから来た人々は、バンガウバンガウでジャルミンと関係を結ぶことを余儀なくされる。彼らの間に結ばれる関係は原則として雇用――被雇用の関係であった。それまでにはなかった社会的な階層関係がバンガウバンガウの中に生じてきている、とセイザーはいう（ibid.）。

セイザーは一連の現象を次のように解釈する。バジャウ・ラウトは自身を周囲の陸のパトロンから解き放ったが、非常に良く似た関係が外部と同様に内部に創造されてきている。つまり、バジャウ・ラウトが「難民」のパトロンとなっている。ある種の契約として、こうした結びつきは過去において陸の人々と海の人々との間にあった関係に非常に類似している（Sather 1984: 24-25, 1997: 89）[14]。

セイザーは現代のバジャウ・ラウトの活動の中に、かつてスール王国期に存在していたパトロン・クライアント関係の復活を見ている。確かに、スール王国期に交わされていた関係と、現代における新しい関係は類似しているのかもしれないが、筆者には類似以上に差異が大きく映る。次章では、両者の間に横たわる大きな裂け目について、両者を比較しつつ論じていきたい。

四章　二つのパトロン・クライアント関係

被支配者としてのバジャウ・ラウトが、クライアントの位置を脱して経済的・宗教的に「認知」されていった後に、フィリピンからの「難民」が到来して、サバ州のバジャウ・ラウトと取り結ぶ関係にセイザーは百年近く前に広く見受けられたパトロン・クライアント関係との相似を見る。

しかし、三章の終わりに少し触れたように簡単に「復活」と見ることは、あまりに文脈を看過した分析に見える。本章ではその相違

点を検討していく。その後で研究の展望をひらき、稿を閉じたいと思う。

四―一　パトロン・クライアント関係

人類学において、パトロン・クライアント関係は主に「農民社会」と、より大きな経済システムとの間で交わされる関係として論じられてきた。一九六〇年代までに盛んに行われていた農民社会の研究を概観する芳賀は、「農民社会」と「外部」との多様な関係をパトロン・クライアント関係として一括するために、パトロン・クライアント関係を拡大して解釈しようとする（芳賀一九七七）。

彼は親族関係や友人関係、儀礼的血縁関係とパトロン・クライアント関係の相違を示そうとする。彼はパトロン・クライアント関係を特徴づけるいくつかの指標を示す。①個別性、②自発性、③互酬性、④継続性が彼の示すそれである（前掲書：一〇二―一〇三）。彼は、パトロン・クライアント関係における、階層性あるいは地位の非対称性に重きを置こうとはしない。パトロンとクライアントの関係を特徴付ける階層性は、彼の示す特徴の中の互酬性との関連において論じられるという。つまり、「パトロンとクライアントというタームの字義通りの解釈にあえてこだわらず、互酬的に交換される物資と奉仕の中身が流れる方向によって質的に異なり、かつその一方の流れをパトロネージとして把握できるならば、パトロネージの送り手をパトロン、受け手をクライアントとみなす視点に立つ」（前掲書：一〇四）のだという。

芳賀の定義は、世界諸地域に見られる種々の「それらしきもの」をパトロン・クライアント関係という一タームの中に包含しようとして、その意味が拡散してしまっている。ただ、彼が階層性を遠景に差し置いたことは本論文との関連において有効な視座を提供してくれる。関係を構成する二者のパトロン性あるいはクライアント性を問題とするのではなくて、両者間の関係の質の相違へと注意が向けられる。以下では、階層的な関係の異なる性質を検討することで、両者の対照を描き出す。

四―二　異なる階層性

スールー王国期のパトロンとクライアントの関係も、現代のパトロン・クライアント関係も、権力者がパトロンとして庇護を与えてクライアントがそれに貢納で応じるという構図がある。パトロンはある種の権威に基づいてクライアントを守護する。しかし、結論を先取りして言うならば、それぞれのパトロンの拠って立つ権威の種類が異なる。この権威の源の差異こそが、二つのパトロン・クライアント関係の差異を指し示す。

スールー王国時代のパトロンは、スールー王国の位階のシステムの中で認知された陸地の首長であったことは既に二章で述べたとおりである。しかし、首長はスールー王国のスルタンの任命によるものの、任命は地方の既存の首長の追認であった。スルタンの「任命」は名目上なものにとどまっていた。すなわち、パトロンの権威はパトロンとクライアントとの間の関係が埋め込まれた、より大きな政

治システムとは関連せずに存立しえた。パトロンは、従者の数がその権勢を示す、個人的に築き上げた権威によってバジャウ・ラウトをクライアントとしてその懐へと招き入れることができた。

しかし、現代のパトロンとクライアント関係におけるパトロンをパトロンたらしめる権威は、スールー王国期のような個人的な権勢ではない。フィリピンから到来する「難民」を前に、パトロンとして庇護する立場にたつ者は必ずしも特殊な実力者である必要はない。彼をパトロンたらしめる要素は、マレーシアの国民であるという点にある。「難民」を身元保証するのに必要なのは国民国家システム内での合法的なステイタスである。すなわち、パトロンの権威は、対面する二者関係を包含する国民国家システムがあって初めて成り立つ。

ところで、フォックスらは非対称な関係の分析において「先行性(precedence)」を用いて論じる(Fox 1996)。「先行性」は相補的なカテゴリー(年上の/年下の、先に生まれた/後で生まれた、など)に基づいて言語学的に構築され、再帰的に関係の連鎖を作り出す。単一の価値による関係に基づいた階層性といった捉え方に対して、「先行性」は構造的な相対性を持ち、偶発的なものであるとする(Fox 1996: 131-132)。フォックスらにならって「先行性」という補助線を引いて、それぞれのパトロン・クライアント関係が異なる種類のものであるとする主張を繰り返したい。

現代のパトロン・クライアント関係において、パトロンをパトロンの位置へ収めるのは、サバ州で「マレーシア国民」あるいは「サバ州民」として暮らしているという点にある。二つの国民国家が形成された時に、「マレーシア国民」あるいは「サバ州民」というステイタスを得た者は、「難民」に対して相対的に「先行性」を持つ。どれほど相対的であったとしても、ある国民国家の領域内に先んじて「定住」したという「先行性」が、階層を構成する権威となっている[15]。

確かに、スールー王国期にパトロンの位置を占めることが多かったタウスグ族の起源神話において「先行性」が優位性の根拠となっていた。ただ、一章で触れたようにそうした起源神話は、現存する階層性から演繹された「エスニシティ化」の結果である。パレセンらの言語学的研究はこれを裏付ける(Pallesen 1985)。つまり、スールー王国期にはパトロン・クライアント関係から「先行性」が導き出されたのに対して、現代のパトロン・クライアント関係では一つの国民国家への「先行性」がパトロン・クライアント関係を形成した。

まとめると次のようになる。階層性の根源にある差異に目を向ける必要がある。地位の階層性という一点において二つのパトロン・クライアント関係に類似性を見出すことは可能であるが、それぞれの置かれた文脈は異なる。特に後者において国家の介在を看過することはできない[16]。前者が前近代的な国家システム内の関係であるとするならば、後者は近代的な国家システムを前提にした関係である。アフリカの難民を研究するマルッキは、流動的な事象の中の国民国家システムの存在に自覚的であろうとする(Malkki 1992)。筆

者もまたスールー海において同じことを主張する。バジャウ・ラウトについての人類学的研究もまた、近代的な構築物としての国民国家の存在を射程に捉えたものでなければならない。

確かに近代以前のスールー海でバジャウ・ラウトは海の上を自由に往来し、また同時に、この自由さが当地の経済システムの存立基盤になっていた[17]。しかし、同様の視点を現代に設定することはできない。移動の舞台としてのスールー海もまた国民国家の秩序の中に位置づけられているのである。いかに境界に近いところであったとしても、いかに物理的に境界を越えることが容易だとしても。彼らを分析する枠組みは現代的な事象への注意を向けたものでなければならない。

セイザーはバジャウ・ラウトについての包括的な民族誌を残した一人に数えることができる。彼のモノグラフにはそれぞれの時代背景の描写も垣間見ることができるものの、それと彼の行ったミクロな人類学的な実地調査が有機的に結合されていない。彼が言うところのパトロン・クライアント関係の類似性は、二者間の関係性のみに注意を向けた結果であり、同時にそれは彼の民族誌の抱える欠陥、すなわち彼らの置かれている文脈を考察の対象としなかったことを示す。

四―三　展望

近代的な構築物、とりわけ国家を人類学的研究の視野に捉える必要性を筆者は主張した。スールー海のバジャウ・ラウトの交易活動を「越境」を手がかりに研究する床呂もまた同一の方向性を示唆するが、国家的なるものの扱い方において筆者の見解と相違を見る。異なる方向への展開を示唆して稿を閉じたい。

床呂は一九九〇年代前半に主に人類学的な調査を行い、その成果をいくつかの論文にまとめるとともに、一九九九年にはモノグラフを著した。彼はバジャウ・ラウトを「自由な海の民」として描くことを、西洋の反転像として鋳型へと流し込むある種のオリエンタリズムであると批判を加える（床呂一九九九：一六五―一六七）。

しかし、床呂は彼らの「越境」という実践の中に特別な意味を付加しようとしているように見える。床呂は言う。「彼らスールーの海の民は、複数の国民国家の存在を前提とした上で、それら国家と国家の『はざま』としてボーダーを逆手にとって生きる人々なのだ」（前掲書：一六六）。これ以外に何度か述べられる「逆手にとって」という言葉は彼の立場を端的に示す。「スールーの海の民」が国境を「逆手にとって」、「利用」すると表象する時に、床呂は近代的な国民国家システムの存在に関して自身が行なった記述から何とか逃れようとしている。彼は国境を次のように捉える。「権力によって明確に固定された筈の国境線は、それを逆手にとって活動する人々の日常的な実践によって絶えず振動し、揺らぎを含んだ存在として立ち現われてくる」（床呂一九九九：一六七）。人々の行うミクロで日常的な実践は、国境線を揺るがしているというのである。

国民国家イデオロギーを相対化しようと彼がすればするほど国境はふたたび揺らいでいき、床呂の批判しようとする「国家なき自由

な海の民」に再接近する危険を孕む。筆者は床呂の見解を過剰解釈であると考える。（それが何であれ）バジャウ・ラウトの海を渡るという行為の中に「逆手にとって」といった実践知とでも呼ぶべき意図を読み込もうとする彼の見解は、中川がいうところの解釈行為であり（中川 一九九六：一七―一八）、それは人類学者の営為ではないだろう。人々の行為を行動そのものから解釈することの重要性を踏まえつつも、こちら側の姿勢を織り込むような意図の記述は避けなくてはならない。ここにおいて床呂と筆者は袂を分かつ。

人類学者が現代においてバジャウ・ラウトを研究しようとする際には、政治・経済といった彼らが埋め込まれている文脈への注意が必要である。しかし、それは同時に彼らの行為の中に特別な意図を読みこむものであってはならない。国民国家や資本主義経済などの介在の中で、彼らの行為をどのように記述することが可能であるのかといった探求をも継続していかなければならないだろう。

おわりに

本論文では、スールー海のバジャウ・ラウトについての人類学的研究の方向性を探るべく、スールー王国時代と現代の二つのパトロン・クライアント関係を比較してその差異の質を示した。移動性が高いとされてきたバジャウ・ラウトも現代的な文脈の中に位置づけないことには、彼らの社会や文化の像を描き損なう。筆者の見解は、国民国家の存在を忌避しようとする論者にとっては悲観的な見解かもしれないが、虚構であると退ける時に隠蔽するものの大きさに自覚的でなくてはならないだろう。人類学的研究の内にそれらを適切に配する事が肝要である。

しかし、本論文がすべて先行する文献研究にのみ依拠していることの限界を認識せねばならない。本論文は問題を提起したに過ぎない。提起した点が指し示す方向に、人類学的な調査と共に歩を進める必要があると考える。

《注》

（1）たとえば内田（内田 一九九三）、ジョンストン（Jonestone 1993）などのほかに、一九八〇年代に家船でバジャウ・ラウトと共同生活を行った門田が、彼らの生活を詳細に報告している（門田 一九八六、一九九〇）。

（2）バジャウのほかに、「パラアウ（*pala'au*）」や「ルワアン（*luwa'an*）」といった差別的ニュアンスを含んだ呼称もある（Sather 1984: 12-13）。

（3）セイザー（Sather 1976, 1984, 1985, 1993, 1997）、ニッモ（Nimmo 1968, 1986, 1990、ニモ 二〇〇一）を参照。この他に、ウォーレンもサバ州東岸のバジャウ・ラウトについて研究している（Warren, C 1980）。ラピアンと長津は東南アジア地域におけるサマ／バジャウ研究を広く概観している（Lapian & Nagatsu 1996）

（4）床呂（床呂 一九九二、一九九六、一九九九）、長津（長津 一九九四、一九九七、二〇〇一）を参照。彼らのほかに、赤嶺がスールー海での漁撈形態の変化とその流通について論じている（赤嶺 一

九九九）。また、スールー海の宗教については、三浦がいくつかの論稿にまとめている（三浦 一九八三、一九八四）。

(5) バジャウ・ラウトの「定住」化の過程およびその諸側面については、床呂（床呂 一九九九）や長津（長津 一九九四）によるレビューを参照した。また、スールー諸島のシタンカイ島で調査を行った寺田は「定住」と国民化を併せて論じている（寺田 一九九六）。

(6) 床呂はスールー諸島で伝統的に家船で生活をしてきた漂海民が、杭上家屋を建設・居住している事例を挙げながら、漂海生活と定住生活とを対立する二項とせず、「両者の間には架橋不可能な断絶を想定するよりは、むしろゆるやかに移行していくグラデーションのようなものを想定したほうが実情に近いのではないだろうか」（床呂 一九九九：一四〇）という。また、杭上家屋に住み始めた後に再び家船での生活を始めた事例を引きながら、移動性の高い生活から定住的な生活への移行が「後戻り不可能な過程とは言い切れない」とする（前掲書、同頁）。

(7) スールー王国の経済的繁栄の性質は、ウォーレン（Warren, J. F. 1981）によって研究されている。彼はスールー海での王国を中心とした経済ネットワークを明らかにし、これを「スールーゾーン」と名づけた。

(8) こうした交易の中心地となった都市としてセンポルナが上げられる。センポルナの形成とバジャウ・ラウトの関係についてはウォーレン（Warren, J. F. 1971）の議論を参照した。

(9) サバ州の公式統計にもバジャウの項が設けられた。しかし、サバ州の統計はその項目がしばしば増加と減少を呈する（Bhar 1977）。州政府の政治とも関連する問題である。サバ州におけるエスニシティの概況については上杉（Uesugi 2000）の議論を参考にした。

(10) ニッモ（Nimmo 1986）やハッサン（Hassan 1978）の研究は、人々の移動が必ずしも内戦のみによるものではないことを示唆する。フィリピンでの経済機会の少なさに対するマレーシアでの相対的な好況や、商品作物の価格の不安定さといった経済的要因とタウスグ族の移動を促した行政区の再画定といった政治的要因が複雑に絡まりあった結果、サマ／バジャウの人々の人々をサバ州へと移動させた。

(11) ニッモによると、移動していった方向は必ずしも南西方面だけではなく、北のホロ島やミンダナオ島の方にも人は移動していったという。また、バジャウ・ラウトのみがサバ州に移っていったわけではないと留保する（Nimmo 1986：31）。

(12) サバ州東岸においてフィールド・ワークを行った富沢もパトロン・クライアント関係に言及している（富沢 一九九七）。ただし、パトロンとクライアント間を往来する財なりサービスに関する詳細な記述が本論文との関連でにおいては不足しているため、彼の議論は考察の対象外とした。

(13) ホー（Ho 1989）や浜元（浜元 一九九五）の研究は、サバ州内の「非合法的な」フィリピン人の共同体について言及している。

(14) バジャウ・ラウトのパトロンの中には、スポンサーシップを伝統的な慈悲の義務の遂行と見なしている者も多いが、関係を通じたクライアントの従者と彼らの財を使って、自身の地位と政治的影響力を高めようとしているのだという（Sather 1997: 89）。

(15) もっとも、マレーシアに先んじて居住していた者の中には、シチズンシップを得ることの重要性を認識せずにこれを取らずにいた者もいた。しかし、後に彼らは不利益を被ることになる（Sather 1997: 87）。

(16) 筆者は政治システムの相違と同時に、両者が位置付けられる経済システムの相違にも自覚的である。後者のパトロネージは賃金労

働や貨幣の交換を基盤にしており、前者の物的貢納との相違は明らかである。ただし、本論文ではこれについて論じない。稿を改める必要があろう。

(17) こうした描き方が過去のロマン化の危険をはらんでいるかもしれない。バジャウ・ラウトを描く歴史的資料は限られており、スールー王国期の彼らの活動は植民地側からの記述からうかがい知るのみである。しかし、現代の活動と比して、相対的にそうであると述べているに過ぎない。

《参考文献》

赤嶺淳
一九九九「南沙諸島におけるサマの漁業活動」『地域研究論集』二(二):一二三—一五二。

池端雪浦編
一九九九『東南アジア史Ⅱ 島嶼部』山川出版社。

内田道雄
一九九三「ボルネオに近いフィリピン国境の海、スールー諸島の漂海民」『AERA』六(一):五〇—五一。

鶴見良行
一九八四『マングローブの沼地で』朝日新聞社。
一九八六「フィリピンの難民:ミンダナオ内戦を中心として」国連大学・創価大学アジア研究所編『難民問題の学際的研究:アジアにおける歴史的背景の分析とその対策』お茶の水書房、六三—九三。

寺田勇文
一九九六「スルー海域のサマ族—海洋民の国民化をめぐって」綾部恒雄編『国家の中の民族:東南アジアのエスニシティ』明石書店、二一七—二五二。

床呂郁哉
一九九二「海のエスノヒストリー—スールー諸島における歴史とエスニシティー」『民族学研究』五七(一):一—二〇。
一九九六「越境の民族誌」青木他編『移動の民族誌』岩波講座文化人類学第七巻岩波書店、一五九—一八六。
一九九九『越境』岩波書店。

富沢寿勇
一九九七「東南アジア海域世界と海洋民」塩田光喜編『海洋島嶼国家の原像と変貌』アジア経済研究所、一三七—一六二。

中川敏
一九九六「オリエンタリズムと数学の直観主義」『社会人類学年報』二二:一—二二。

長津一史
一九九四「スルー諸島における近代化と社会変容—漂海民バジャウの定住化をめぐって」『Tropics』三(二):一六九—一八八。
一九九七「海の民サマ人の生活と空間認識—サンゴ礁空間 t'bba の位置づけを中心として」『東南アジア研究』三五(一):二六一—二〇〇。

2001 Pirates, Sea Nomads or Protectors of Islam?: A Note on Identification in the Malaysian Context.『アジア・アフリカ地域研究』一:二一二—二二〇。

ニモ、H.アルロ
二〇〇一『漂海民バジャウの物語』西重人訳、現代書館。

芳賀正明
一九七七「パトロン—クライアント関係の諸タイプと農民社会」『民族学研究』四二(二):九七—一一五。

浜元聡子
一九九五「東マレーシア・サバ州における人の移動―スルー諸島からのバジャウ族の移動を中心に―」『南方文化』二二：九〇―一〇六。
三浦太郎
一九八三「スーール．モロにおけるアッラー」『歴史と構造』一一：三一―三八。
一九八四「スール・イスラーム社会におけるシンクレティズムの一側面」『南方文化』一一：四九―六五。
門田修
一九八六『漂海民月とナマコと珊瑚礁』河出書房新社。
一九九〇『海賊のこころ―スール海賊訪問記』ちくま書房。

Bhar, S.
1977 The Community Structure of Sabah: An Appraisal of the 1970 Population and Housing Census of Malaysia. *Borneo Research Bulletin* 9: 23-29.

Brown, D. E.
1971 Brunei and the Bajau. *Borneo Research Bulletin* 3: 55-58.

Che Man, W. K.
1990 *Muslim Separatism : The Moros of Southern Philippines and the Malays of Southern Thailand.* Singapore: Oxford University Press.

Fox, J.
1996 The Transformation of Progenitor Lines of Origin: Patterns of Precedence in Eastern Malaysia. *Origins, Ancestry and Alliance: Explorations in Austoronesian Ethnography.* Fox, J. and Sather, C.(eds), Canberra : Dept. of Anthropology, Australian National University.

Frake, C. O.
1980 The Genesis of Kinds of People in the Sulu Archipelago. *Language and Cultural Description: Essays*, Charles O. Frake (ed.), Stanford: Stanford University Press, 311-332.

Hassan, Abduljim.J.
1978 Characteristics of Backdoor Migrants to Sabah. *Mindanao Journal* 5(2): 98-119.

Ho, T. S.
1989 International Migration and Urban Development: the Case of the Filipino Immigration. *Urbanisation and Development: Prospect and Policies for Sabah beyond 1990.* Mohd Yaakub Hj. Johari and Baldev S. Sidhu (eds.), Kota Kinabalu: Institute for Development of Sabah, 225-242.

Johnstone, Ralph.
1993 The Sea Gypsies, Hard Times for a Vanishing Philippine Tribe. *Asiaweek* 21 April: 46-55.

Kiefer, T. M.
1972 *The Tausug: Violence and Law in a Philippine Moslem Society.* New York: Holt, Rinehart and Winston.

Lapian, A. B. and Nagatsu.K.
1996 Research on Bajau Communities: Maritime People in Southeast Asia. *Asian Research Trends* 6: 45-70.

Malkki, L. H.
1992 National Geographic: the Rooting of Peoples and the Territorialization of National Identity among Scholars and Refugees. *Cultural Anthropology* 7(1): 24-44.

Nimmo, H. A.

1968 Reflections on Bajau History. *Philippine Studies* 16(4): 32-59.

1986 Recent Population Movements in the Sulu Archipelago: Implications to SamaCultural History. *Archipel* 32: 25-38.

1990 Religious Beliefs of the Tawi-Tawi Bajau. *Philippine Studies* 38: 3-27.

Pallesen, A. K.

1985 *Culture Contact and Language Convergence. Linguistic Society of the Philippines*, Monograph Series, No. 24, Manila: Linguistic Society of the Philippines.Saleeby, N. M.

Saleeby, N. M.

1963 *The History of Sulu.* Manila: Filipiniana Book Guild.

Sather, C. A.

1976 Kinship and Contiguity: Variation in Social Alignments among the Semporna Bajau Laut. *The Societies of Borneo: Explorations in the Theory of Cognatic Social Structure*, Special Publications, NO. 6, George N. Appell (ed.), Washington: American Anthropological Association, 40-65.

1984 Sea and Shore People: Ethnicity and Ethnic Interaction in Southeastern Sabah. *Contributions to Southeastern Asian Ethnography* 3: 3-27.

1985 Boat Crews and Fishing Fleets: The Social Organization of Maritime Labor among the Bajal Laut of Southeastern Sabah. *Contributions to Southeastern Asian Ethnography* 4: 165-214.

1993 Bajau. *Encyclopedia of World Cultures* 5, David Levinson (ed.), Boston: G. K. Hall, 30-35.

1997 *The Bajau Laut : Adaptation, History, and Fate in a Maritime Fishing Society of South-eastern Sabah.* South-East Asian Social Science Monographs. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

Uesugi, T.

2000 Migration and Ethnic Categorisation at International Frontier: A Case of Sabah, East Malaysia. *Population Movement in Southeast Asia: Changing Identities and Strategies for Survival, JCAS Symposium Series 10, Population Movement in the Modern World* Ⅳ: 33-53.

Warren, C.

1980. Consciousness in Social Transformation: The Bajau Laut of East Malaysia. *Dialectical Anthropology* 5: 227-238.

Warren, J. F.

1971 *The North Borneo Chartered Company's Administration of the Bajau, 1878-1909: The Pacification of a Maritime, Nomadic People.* Center for International Studies, Southeast Asia Series, No. 22, Athens: Ohio Universities Press.

1981 *The Sulu Zone, 1768-1898: The Dynamics of External Trade, Slavery, and Ethnicity in the Transformation of a Southeast Asian Maritime State.* Singapore: Singapore University.

"The Task and Perspective of Anthropological Study about Bajau Laut"

UEDA Toru

This paper aims at critical examination of the precedent studies about an ethnic group called Bajau Laut, who have been described as the "Sea Nomads" or "Sea Gypsies", living on the Sulu Sea ranging from Sabah Malaysia to the Philippines. It also attempts to explore the direction for future studies. After reviewing the nature of the two patron-client relationships, mentioned in the monograph about Bajau Laut written by American anthropologist, Clifford Sather, the difference between them will be clarified. This difference depends on the different contexts in which Bajau Laut are embedded. Attention must be paid in anthropological research to the difference of each context accordingly, because despite their high-mobility life in the border zone as called the "Sea Gypsies" or "Sea Nomads", they are still living in the national order.

Key Words

Bajau Laut; patron-client relationship; Sabah Malaysia; The Sulu Sea; settlement